

- | |
|-----------------------------------------------------------|
| 2. 取組を進めるに当たり困難であった事例
C. 教員の教育・研究指導能力の向上のための方策
④その他 |
|-----------------------------------------------------------|

取組を進めるに当たり困難であった事例について

C. 教員の教育・研究指導能力の向上のための方策

④その他

《人社系》

●一橋大学社会学研究科総合社会科学専攻、地球社会研究専攻

「キャリアデザインの間としての大学院」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

プログラムの実施運営は、キャリアデザイン推進室委員会が中心になって行った。推進室委員会に属する教員や高度職業人養成科目を担当する教員、キャリア支援者の特任講師はプログラムの実施運営に積極的かつ熱心に参加し、これらの教員や事務職員の努力でプログラムが支えられた。しかしそれ以外の教員の間では温度差があり、プログラムの認知度や講習会への参加の点で教員の間での差や偏りがあった。FDを実施してこのような問題に対処しようとしたが、温度差の解消には至らなかった。

(苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

教員は授業等の教育や研究、会議等の業務で多忙であり、特にプログラムの担当者として指名されなければ、プログラムへの関与、参加は時間的にも大変である。特に大学院は大学院重点化以降院生数が増加したことで教員の負担が重くなった。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

何度かFDを実施して、教員の間での理解を広める努力をした。

●大阪市立大学文学研究科

「国際発信力育成インターナショナルスクール」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

特定の教員、とくに英語担当教員に負担が偏る。

(苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

大学院生が英語による発表を行うためのトレーニングプログラムの一部を外注した。発表指導のうち専門領域の指導については指導教員の協力を強く求めた。また、インターナショナルスクール日常化プログラムにより、それぞれの教員が自分の研究分野に引きつけながら小規模の国際フォーラムを開催しやすくした。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例
C. 教員の教育・研究指導能力の向上のための方策
④その他

トレーニングプログラムの外注により英語教員の負担が少しだけ軽減した。インターナショナルスクール日常化プログラムにより、より広い層の教員の協力が得られつつある。